高橋恭子著

『戦前病院社会事業史
――日本における医療ソーシャルワークの生成過程』

評者：山村　りつ

本書は，著者の博士論文を基に執筆されたものであり，戦前に見られたわが国の医療ソーシャルワークの萌芽に焦点を合わせ，日本の社会保障・社会政策に関する文献に加えて，実存した医療関連分野における活動記録などの膨大な史料の分析によって，日本の医療ソーシャルワークの源流を明らかにするものである。その意味で，本書に示される研究は一つには重要な歴史研究であり，一方でわが国のソーシャルワーク実践についての一般的理解に波紋を投じ，またその新たな理解をもって今後についての新たな示唆や課題を提示しうる実践研究でもある。

＊

本書は序章と終章を含んで全９章から成る。博士論文を基にしていることもあり，序章では「研究方法」についての丁寧な記述がされ，目的・手法・概念および先行研究の整理などを行い，第１章からがいわゆる本論となる。

第１～２章では，本研究の理解の前提となる社会的および理論的背景が整理されている。第１章は，当時（明治期から戦前まで）の貧困問題と生活困窮者への医療保障について，制度的な変遷や医療分野の近代化，時代背景とともに説明し，また第２章では医療ケースワークの理論と実践について，こちらも当時の歴史的な背景や史実の確認を通して説明している。これらの記述は，わが国の医療ソーシャルワークの萌芽とその実態を直接的に説明するものではないが，ここでの丁寧な「前置き」がその後の史料分析において不可欠なものであることは後にわかる。

続く第３～６章は，本書における研究の核ともいえる部分で，４つの個別の病院の医療ソーシャルワーク（の前身的活動）について当時の史料をもとに分析を行っている。ここでの記述の基となる史料には関東大震災や第二次世界大戦などを経て喪失したものも多く，またその現存の状況にも病院によってばらつきがあるため，必ずしも４つの対象を均等かつ同じ形式で記述できていない部分もあるが，分析の枠組みとして ①病院の組織と事業内容，②対象者と対象地域，③後援団体，④病院社会事業部門の目的や設置経緯・組織的な位置づけ，⑤病院社会事業への理解者や影響を与えた人物とその思想，⑥相談員の人数・性別・待遇・教育等の背景・思想，⑦病院社会事業の実践について相談内容・取扱件数・援助の方法，という７項目を立てることで，その後の比較分析につなげている。それぞれの項目の記述は，現存する史料に基づき丁寧かつ詳細に行われており，特に当時のケース記録を用いた実践内容についての記述は，他ではみることのできない貴重な資料といえるだろう。そして，それらを第７章で比較分析することで結論を導き出し，終章で総括を行っている。

第７章および終章では，まず第３～６章のまとめとして上記の７項目をそれぞれ項目ごとに整理し，その結果として，本書のリサーチ・クエスチョンの一つでもある「なぜ一部の病院で病院社会事業を開設し，継続，展開できたのだろうか」（本書：14）という問いに対して，そ

の要因・条件を4つ掲げている。さらにそれを受けた終章では，戦前の病院社会事業史を再度概観するとともに，「内発性」という概念を軸に，これまで一般に戦後からと考えられていた医療ソーシャルワークの本格的な実践が戦前にもあったことを示し，それがわが国独自の医療ソーシャルワークの展開の一部として再評価されるべきであると結論づけている。

*

本書の意義の一つは，やはり「戦前」という時期に光を当てたことであるだろう。著者自身も認識していることであるが，わが国の医療ソーシャルワークについての理解において，その本格的な出現は戦後からとする認識が強いと思われる。戦前にみられたソーシャルワークの原型となるような先駆的な活動は，いわゆる生活困窮者や病者，そして家制度と徹底した男性稼ぎ手モデルの下で社会的に弱い立場に陥りやすい子どもや女性，高齢者など多岐に渡る領域にみられたが，医療ソーシャルワークの実践について本書が明らかにしたような活動がみられたことはこれまで示されてこなかった。特に，単なる医療の給付ではなく，本書で示しているような医療の効果を最大限にするための支援，医療の施術に影響を与える生活環境への働きかけとしての活動を，しかも実際の記録に基づき史実として明示したことは，本書の重要な意義であるといえる。

また，ほぼ同時期に発生した医療分野におけるソーシャルワークの前身となるような活動のいくつかを横断的にとらえ，比較を通じてこれらの活動の発生の要因・条件を提示している。この点も本書が達成した大きな成果であるだろう。あげられた要因や条件のそれぞれは必ずしも想像もしなかった新たな要点というものではないが，しかしながら，それを推測ではなく史料から実証したということに意味がある。そしてこの点を理解することは，今後のソーシャルワーク実践の発展においても有益な知見を提供するものであるといえる。

さらに，やはりこの膨大な史料に真摯に向き合い，ここまで分析を深めた著者の熱意と研究者としての眼差し，そしてそれを本書として結実させたことは評価に値するだろう。それにより本書は，同時にソーシャルワーク領域における歴史研究の一つのお手本ともなる。そして少なくとも評者がそう思いを巡らせたように，本書を受けてその他のソーシャルワーク領域における実践についての歴史研究へと，新たな展開をもたらす可能性があるのではないだろうか。このようなソーシャルワークにおける他領域への展開をも想起させるのは，本書が最も狭義の医療ソーシャルワーク活動のみに着目するのではなく，境界上にある近接領域の活動も射程に収め，また実践上で関わりを避けることのできない他領域（医療や保健衛生）との関わりにも目を向けているからである。

以上のように，本書はさまざまな点から大きな意義のあるものであると考えるが，それを踏まえたうえで，いくつかの点を指摘したい。

まず4つの病院の記録の比較分析であるが，本書では主に共通事項に焦点を合わせ，戦前の医療ソーシャルワーク（の前身的活動）が発生し，また継続しえた条件を示したが，一方でそれらの「違い」の影響についてはあまり言及がない。4つの病院は設立の経緯・経営母体・背景にある（宗教的）理念等がそれぞれ異なるが，そのような違いは果たして諸活動の発生や展開に影響を与えないものであったのか。この点を分析することは，おそらく共通事項から明らかにした条件についての論証をより強固にするものではないかと思われる。同様の点でいえば，4つの病院以外の病院，すなわち著者が定義する「病院社会事業」を行わなかった（行え

なかった）病院との比較という点にも関心がいく。4つの病院の共通事項から導き出した条件は，それではそれ以外の病院にはみられないものだったのか。その点の確認はぜひほしいところではあった。

また，比較分析において，特に活動内容の分析における判断基準がわかりにくい部分があった。ケース記録などの質的分析の難しさは，質的研究全般におけるコーディングの了解可能性や客観性の課題に通じるものであり，評者自身にとっても常に課題となる点であるため具体的な対策をここで示せるものではないのだが，やはりソーシャルワークやその関連領域に馴染みのない者にはわかりにくいところがあるように思う。そういった意味で，分析の枠組みについて，活動内容の部分だけでももう少し詳細に説明があれば，なお理解が進んだように思われた。

次に，著者が分析の軸の一つとした「内発性」についてである。これも，「日本の（医療）ソーシャルワークはアメリカからの輸入である」という，ある種の「思い込み」に対して，国内からの内発的動機を明らかにしており，本書の論証の一翼を担う重要な概念であるといえる。特に著者は，その一つとして現場の要請があったことを時代背景や社会情勢，当時の記録などから明らかにしている。明治期からの近代化における社会変化の中で人々の生活課題が生じ，ソーシャルワークのような支援のニーズが発生することは容易に想像はできるが，それを改めて事実として整理し，医療ソーシャルワークの内発的動機の一端として示したことは評価されるべきであろう。しかしながら，「国内の要請」に対して「外国で学んだ（見識を深めた）」者が実践をスタートさせる経緯の，相互の関連があまり明確ではないように思われる。ともすれば，「外国で学んだ」ことが「国内のニーズ」に気づく原因となったとも読み取れ，その場合，それを内発的と位置づけてもよいのかという疑問が生じる。終章の最後部にそれに関連すると思われる記述もみられるが，論述のより中核的な位置づけとして，国内からの要請がニーズとして認識される経緯についての内発的要因（と外発的要因）を踏まえた詳しい説明があれば，この点についての疑問は解消されただろう。

最後に，現在のソーシャルワークの理論および実践との関係についてである。本書ではその論述の初めの段階で，戦前の活動が「近代的医療社会事業でない」とされてきた点を指摘している。また，本書の史料に基づく記述でも，「相談者が主体の問題解決」や「できることは何でもしてあげる」といった，現在のソーシャルワークの理論とは矛盾するような表現もみられる。しかしながら著者が，活動の記録を詳細に分析することによって，そのような違いはあってもやはりこれはソーシャルワーク（ケースワーク）なのだと位置づけている。とするならば，そこから現在のいわゆる「近代的」なソーシャルワークへの転換は，いつ，どのように起こるのか，そこに，戦前の医療ソーシャルワーク実践はどのようなかかわりをもっているのか。

その点について，もう一つ印象に残ったのは，著者が引用した浅賀ふさの医療ソーシャルワークの定義であり，そこには「救済事業ではない」（浅賀 1956：1）という文言がある。この言葉を一つの象徴として，浅賀ふさ（とそれに続く聖路加国際病院）の活動におけるソーシャルワーク観とそれ以外の病院におけるそれには乖離があるという印象を，本書を通じて受けた。そしてその乖離は，いうなれば現代のソーシャルワークと本書で描かれた戦前のそれとの乖離でもある。

このようなソーシャルワークのいわば「価値」の部分におけるギャップに加えて，聖路加国際病院の実践については特に戦後への継続についての言及も多い。そのような点から，少し極大的ではあるが解釈をすれば，本書で取り上げられた4つの病院による実践のうち，聖路加国際病院の実践だけが戦後も残り，理論的にも維持され，それ以外の実践は消失してしまったのか。あるいは，大戦を通じてあらゆる実践や理論の継続がすべて断たれてしまい，戦後の医療ソーシャルワークは全く新しいものとして「GHQからの移植」（本書：300）により登場し，それがこの乖離の原因となっているのか。本書を通じて読み取られる，実践におけるソーシャルワーカーの認識の現在との乖離からは，その前後の関係，その間をつなぐ転換のプロセスについての上記のような新たな疑問が想起される。

この点について著者は，終章の終わりで戦後の病院ソーシャルワークとの関係性について触れている。ここでは，戦後の実践に継承された認識と継承されなかった活動部門があげられ，また聖路加国際病院が中心的な役割を担ったこと，しかしそれが単一のスタート地点ではないことなどを述べているが，やはり戦前から戦後，そして現代の医療ソーシャルワークに向かう理論的・実践的転換との関係性が十分に説明されているとはいいがたい。

しかしながら，上述のような現代のソーシャルワークとの関連という点などは，本書で論じられるものというよりは，本書の研究に続く次の新たな課題として掲げられるべきものでもあるのかもしれない。むしろ重要な点は，このように本書が，本書の記述を出発点として新たな発展的課題をもたらすものであるということである。それはやはり，本書がさまざまな新たな認識や知見を提供するものであるからに他ならない。

このように，本書は医療ソーシャルワークや社会事業史などを研究対象とする研究者以外の者にとっても，さまざまな示唆を提供するものである。テーマそのものをみれば，ソーシャルワーク領域のなかでも医療ソーシャルワークに的を絞り，さらにその戦前という限られた時期の歴史研究という，非常に限定的な対象に絞られた研究が描かれたものである。しかしその史料の多さ，丁寧な研究の手続き，著者の開かれた視野とそれに基づく研究としての十分な土台作りなどの点から，医療ソーシャルワークについての新たな一説を提供するものとしてだけでなく，現在のソーシャルワーク論の再考や医療とソーシャルワークの関係の再認識，行政主導の社会政策ではなくボトムアップによる社会サービスのプロセス理解から，研究技法としてこれまであまり重視されてこなかった感のある歴史研究の再評価など，さまざまな発展の機会を提供するものであるだろう。

（髙橋恭子著『戦前病院社会事業史――日本における医療ソーシャルワークの生成過程』ドメス出版，2016年1月，366頁，定価6,000円＋税）

（やまむら・りつ　日本大学法学部公共政策学科専任講師）

〈引用文献〉

浅賀ふさ（1956）『医療社会事業従事者養成講習会講義テキスト　医療社会事業』全国社会福祉協議会.